

和田開明
定節
編輯
小説

春雨文庫

第三號
上



A416
5

梅亭金鴛閣
和田定節編輯

開明
小説

春雨文庫

東京書肆文永堂

子孫傳

作者が自らとゆふは作を和
 詩に變體を綴るをもよ
 序文より代ふ
 茲よりこの文庫ありけり
 別の土地へて道遥とあり
 無盡の情を中
 野
 姿新し〜流れると寫す

我々

櫻將妬海棠

桃被惡山薑

冊中奇絶説得と妙あり

文は花あり讀んで佳境は入る

明證の卷談いふ見るが如し

章は實あり時宜の用を識ぬ

されど毫の林は鳥も啼まぬ

春雨三ノロ

硯の海は氷解るは

書房は是を以て米櫃を繕らひ

人それをもとて火鍵の徒然

如是々々

春雨文庫

我々

明治十年の春の一日

洋狂戲述







渡邊吉太郎

五齋
百一

春雨三ノ三



濡いろ糸
初子
石申
若子
長孫
梅子
馬

中村於梅

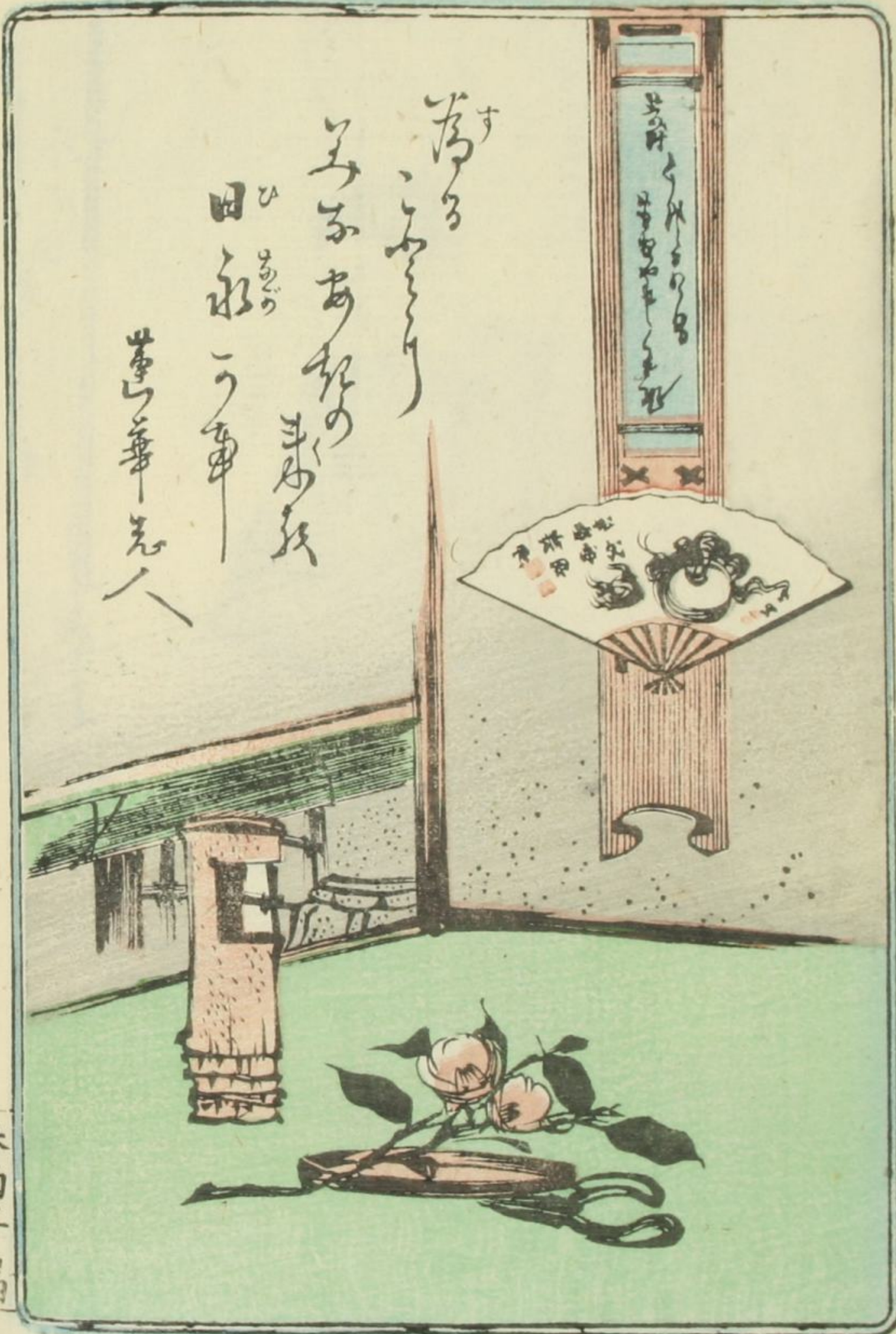
春雨文庫第三編卷之上

東京

松村春輔 閱
和田定節 著

第八回

二間間口ふたまげんまぐちの土蔵見世ぬりごめとせふあまのあま数多あまの書籍あまと積あま
と伴頭ばんとう若わかいも丁ちやう雑ざつまで六む七しち人にんふて立働たちどけと昨日きのう
み今日けふと日ひふ場ま一いっ諸家しよけの藩士はんし上京じやうきやうすればね歴史れきし兵書へいしよ
の注文ちゆうもんよ立居世話たちゐせわ一いっきおん繁昌はんじやうハ何時いづふも覚おぼえぬ程ほど



高たかす
みふあぢの
田ひ水みづ一いっ巻まき
華はな一いっ巻まき人にん

あるども主人の横田清兵衛の家業をよそよ仕入さ
へ伴頭まうせの出あるき丈と異なり女房のお岩の
二十と二ツ三ツと路の雪の色白く眉目かこち美
しきのとならず夫よ貞せつ姑よ事へて孝行あると
内外の人の譽りのふする程ありき此日も清兵衛の
他出る母のお政の去年お岩が産たり清兵衛の
惣領徳太郎を傳の小女と供ふ離れ座しきの日光り
ふ遊をせて居りお岩の一人茶の間みる火鉢へ炭と

次ぎみるぐうお出入り屋しきの長州さまの桂さうぬや
村田さうぬが親しうお出の有るやうふるり何まふよ
らず一際をげんで働このに此頃でい家を外ふる
聞を祇園町の藝子小常とやらを先計町の藤村へ
揚淀め同様ふして置との噂人の口ふ戸を立られず
嘘の話しでいあるまいけきども左様しと氣性の人
べいゝの是ふい何様やら奥ふうい仔細模様の有り
げる事夫に附ても老母さうぬがとろく見世と注覧

みされ せいで 清兵衛の何様して内が嫌ひふ成とら 今日も
姿を見せとらぬ困つと奴のお腹ごち清苦勞とお
させ申さぬが宜と思ひ時よとつての啞八百もさう
さうの言ひ悪い嗚呼何様とりのやト我ふ回ひ我
ふ答への胸塞がり持し火箸の力ぬけ傍へ下せ鐵
瓶の湯の冷るをも歩忘れ思案ふあまる溜息ふ忙
然たりけるおの折から裏口より這入り来るの敷
屋町姉の小路の角に居る松屋寅吉と云ふ書画小道

具と商ふとのふと主人清兵衛ふ取り入り常ふ親
く出入るも急案内もこのず臺所と次の隔りの
障子と明て内と見やり「オヤお一人といお淋しい所
例のふさぎの虫もさらくはを理ぢやア内ぜへやせ
んと言ひなぐつ後を建てきり火鉢の向ふへ居り
とめが岩の莞尔笑顔とほくろひ「何方うと思つ
たら寅さん今日のお得意まをりて長州さまへお往
みさるのぞいませす子「まア其様なりのぞい

へやす吾儕もぞの出かけるの犬も歩行を捧ふ當
うと思ふみからどが此方らの且那の内を外ふるさる
ハ一めん解せやせん何故なら美しくつて程が宜く
つて實があつて小子らでござらうと頭の上へ捧げ
て置ても有り難へと思ふ一分一厘まうじ様のあ
お前さんと捨てさるゝ先計町の藤村へむくり
這入りこんで新主人狐の小常ふ化され常歌だの
常雀どのと言ふ小便くせへ小娘と相人ふ無多るお

金と費や鼻の下と長くお在るさうとい勿体
糸へ訳ぢやア直往へやせんう鰻を廃止ふしう鰻を美
味がつく居るとい何様と理屈多食ふ虫も程
が有りやす男と生れと詮ふ小生らア一中でも宜う
ら鰻の蒲焼のやうな人が給て見ると言ひるぐ
否味らしい目附としてお岩の顔と志のつとりんるお
岩の開知らぬ振りみて煙草を吞まなぐら成布ど
人さんからの丈夫が小常も溺つて藤村へ呼ぶやうふ

見えませうが被あれ少すくし訳わけがあつて吾わが儂ぢが小こ常じょうと揚あげ
て貫ぬふのサそれ夫それどろろ夫それでの實じつふ迷ま惑ごかつて小こ言ごを
かり言いて居おるのどアあねんあれど極きりで亭てい主しゅを
貯たくわふやつサ。エ。モシいお岩いさんお前めさんが何なん程ほど且かつ那なの
鼻はなの下したの長ながく成なるとのつ償なふとお思おもひるすつてもけ
日ひの芝し居お見み明あ日あの義ぎ太た夫ふの寄よせきと人ひと目めも構かまへ
ず聖せい天てんさまの烹あぶりとい言いふの知しらるが被あ様やうで
も有ありと思おもふ様やうひつ附つきの道みち往ゆくの何なんれん

見みとしふ直なぶと成なさせても首くびツとけとしら相さう場じょう
の立たやうの有ありやすめ何なんも男おとこどと言いて此この節せつのやう
では且かつ那なの方かたがあんまりお割わりが宜よろすぎませう小こ生せいお
前めさん程ほどる宜よろ人ひとの江え湖こ上うふまとしをららうとお思おもつ
て居おるせへら鬼おに角かくお前めさんがお最さい愛あいくつつて成なり
やせんト亦またも否いや味あじる目めつきとしてお岩いの顔かほをおうつ
と見みるの時とき何いつ時まのあるよやら下げ婢ぢよのお初はつが後うしろ方かたよ来き
て居おて大おほ声こゑあげ「松ひいらぎ屋やさんが極きりで否いや味あじる振ふりと



仕るをるこへるアと言れて怖ろ可一出し抜けよお初
どんト胸と撫るぐろ一鬼消させちやア笑つて居てサ人の
悪い一オホ一吾儕が貴君をおどしでも仕やアあまひ
所自分の勝手に魂消ておいて其屍を此方らへ持
込んで死を入ッちやア些迷こくで居坐いまするへ
一太岩さんお一人で誰も居た人と思ひ一油断の不意
をおれとので未震へが止らた虫の毒どうろ大
きる声とするのへ堪忍して貫ひてエ一此くらおる

とで魂消るるら三十石の船の食をんろよ鳴り立ら
れると即死をしてお仕まひるさいませう一雀亀と
とい言ふとの即死を去ても宜から乗て見てへと
思ふ船も有るのサと横目でお岩の顔を見るトお初
が傍でまゝと大声一終屋さんの助兵エッろろ一の目付
と一何ぞと言ふとお内室さんのお顔を御覧なさ
るヨ一まゝと嘯鳴のろ全てへお前へ嫉妬やきごととんえ
る一おんとうよ左様るのでは座いますヨ一此らお岩の

茶棚ちやどなもある急須きんすを採とつて煎花あななと入れ煉羊羹ねりやうかんの菓か
子こざらと共ともに寅吉とらきちの前まへへ突き出でし一ツいつ太湯お湯と少すく
冷さましとので茶ちやが太おき遅おそく成なりまし何なん様ようい
こし後のちして是これは有あり難がたう小生こらちも茶菓ちやが菓子こを貴あま嬢じやう
ふ献けんトといと思おもつて少すくくむり持あ参さん致ちし何なんとト
傍かたへに置おき風呂ふうろしき包ふを開ひらき一いつ五十年ごじゅうねんも前まへふ
江戸えどで京御菓子きやうおんこと名なを附つけられ太お賣うりなかつとさ
うどが當時とうじの京都きやうとで江戸えどおん菓子おんこと言いふ銘めいおお

と買人かひてが多いおほいとい妙めうふなるりのサ旅りんと最もとも江戸えどで
新製しんせいで随分菓子ずいぶんこふの骨ほねを折をりやすおの工くまが
れきの牛皮ぎやうひへ山葵さんさいを包ふとこんどととの近ちかびる江戸えどで
の新しん發明めい栄太樓えいとうろうどの藤村ふじむらどので製せいしたのが太おく
此方こつちへまをまつり来きやす一ツいつ上あつては覽らんなせへト袋ふくろ
へ入いれと杉折すぎざりと太岩おおいの前まへへさし出でせむお初はつの傍かた
ら口くちと出でし山葵さんさいとあんのと社あつ務むて蜥蜴いりりの黒くろ焼やき
と牛皮ぎやうひへ包ふんと菓子この皮かわにひはなないませんりお内うち

へ 室さん空然食ると往ません寅下ましとを根ること
言よ 蜥蜴の黒やきぐまへで宜と思ふ人が落るな
ら 意の病ひで疲るふやア及む病へサ初夫でも貴
君縁きり榎と摺小木よこしらんお味噌と摺て否
ふ成と男よ食させると直又遠ざらると言ふぢ
やアござないません寅其様ることを苦勞よするあり
早く往て竈の下と焚つけ病へのりアレ彼鐘の九ッ
どぜと指と折ると死座ざきの方で時計の音ギリと

チヤン
チヤン

終屋寅吉の此家の女房お岩の顔かたち美しきこと
諸事小程よくしを貞實なるふ深く惚れこと清
兵衛と交り厚くし清兵衛と唆るりし小常と
媒妁お岩と清兵衛の中と悪くさせんと謀りし小
清兵衛の寅吉のめくさんの如く小常の為は湯け
て家小片時尻のすいらぬと附込る日ごとみ様
田へ来り頻りふお岩と清兵衛の中へ水と差し

お岩の心を動かし、豫ての望を遂んとすれどもお岩の貞烈ありて言ひよる便あつらざるうち此方へ早くこれと察し下婢のお初めあつらふかどめ言ひはけ置ゆゑお初の面白半ぶんも借こそかゝる議論のあるれ此松屋寅吉より後年又至り清玄湯の忠勇とらまはち多年の機會と過りお岩の貞烈ますます加はり著るこの件々の下回をおひく解分るとして知りぬり

第九回

横田清兵衛の藝子小常の色香引れて先計町の藤村おのそ在りたりが今朝も家へ帰り宿酊の心地にお氣ふ火鉢へより何やら思案の顔つきを女房のお岩の覗きこそ何ぞうお色う悪うござんますすお風邪ごとと往ませんうらお薬を口へ上りませれまとも彼鶏卵酒のお否でござんますけりト案ト顔たる優しさも清兵衛の天窓と搔きながら何の

案^{あん}トて呉^くんるさ^{さん}る風^{ふう}邪^{じゃ}ぢやア^あ福^{ふく}人^{にん}口^{くち}から^ら求^{もと}め^と
病^{やま}ひサ^さタ^た終^{しゆう}屋^やあ^あ無^む理^りや^やり強^{しゆう}つ^つけ^けら^られ大^{だい}酪^{たう}酏^いみ
なり^する^すご^ごぎ^ぎて^て些^{ちと}天^{てん}窓^まが^が重^{おも}い^いの^のど^どが^が今^{いま}み^み直^{ちき}よ^よ快^よく^くる
る^まト^と氣^きの^の毒^{どく}さ^さら^らみ^み言^いと^と吹^ふき^き一^い夫^そぢ^ぢや^やア^あ一^い口^{くち}上^{じやう}ッ^つと^と
昨^{きの}日^ひの^の本^{ほん}酒^{しゆ}と^と呼^よび^び出^でし^して^てあ^あま^まひ^ひ其^{その}あ^あと^とで^では^は膳^{ぜん}より
う^う鶏^{けい}卵^{らん}と^と落^おと^と薄^{うす}い^い雜^あ炊^ぢみ^み致^{いた}し^しま^ませ^せう^うう^う清^{せい}ど^どう
せ^せ女^{にょ}房^{ぼう}任^{にん}せ^せの^の男^{おとこ}ど^ど宜^{よろ}や^やう^うあ^あし^して^て呉^くん^んる^る一^い岩^{いわ}し^しま^まア^あ強^{かつ}
御^いわ^わる^るい^いる^るア^あ憎^{にく}ら^らしい^い女^{にょ}任^{にん}せ^せや^やお^お在^いる^るさ^さら^らく^くせ^せふ^ふト^と言^いひ

長雨正十

る^るぐ^ぐ涼^{りやう}爐^ろへ^へ炭^{すす}と^とつ^つぎ^ぎ下^げ婢^{ぢよ}み^み言^いひ^ひつ^つけ^け小^こ鍋^{なべ}な^なと^と取^と
り^りよ^よせ^せて^てお^お岩^{いわ}の^の忙^{いそ}々^々な^なと^とら^らき^き居^おる^る清^{せい}々^々清^{せい}々^々の^の狩^{かり}黙^{もく}然^{ぜん}
と^と火^ひ鉢^{ぼち}ふ^ふ凭^たれて^て思^し案^{あん}の^のて^ての^の一^い岩^{いわ}の^のお^お茶^{ちや}屋^やで^での^の美^う味^まい^い
と^との^のも^も出^で来^きる^るい^いく^くせ^せよ^よお^お客^{きやく}を^を待^{まち}せ^せる^るの^のが^が上^{じやう}手^てど^どか
ら^ら流^{なが}行^りあ^あい^いの^ので^では^はな^ない^いま^ます^すの^の一^い美^う味^まり^りの^のい^い何^{なん}様^{じやう}ど^どら
知^ちら^ら後^ごく^くが^が内^{うち}室^{しつ}の^の世^せ辞^じと^と氣^き取^とり^りの^の宜^{よろ}い^いの^の外^{がわ}よ^よと^と
い^い評^{ひやう}判^{はん}ど^どぜ^ぜ一^い岩^{いわ}ぢ^ぢ夫^そぢ^ぢや^や其^{その}積^{つみ}り^りで^で此^{この}客^{きやく}様^{じやう}み^みマ^まア^あ澤^{たく}
山^{さん}池^ちを^をと^とつ^つく^くま^ませ^せう^うへ^へ出^で来^きま^まし^しと^と言^いふ^ふこと

ころろが身上ありぎりでお膳の上どけのりの餘り采
静で酒をいし移へて何と胡瓜の糠味噌を
いつア有難へ魚なんぞい実ふ食あきて居るくらん
るのも酒免ごら此節のまど料理屋でも刺身の相
手ぐらぬよやつとどのよ爰の家ぢやアまう香物ふ
遣ふはごらう氣取りが宜とて言て言られるのどア
拵の代り後の鶏卵の雑炊をりり否なる茶屋で酒は
いし移へて何と馬走よりやせうと岩酒

と取らせ迎ひ酒の熱燗と苦い顔して飲まぐら一實
み無理酒の身体ふ當るよ家で被様して飲のみかぎ
る一実正み餘りたんといふ毒ふ成ううと思ひし酒
ととんと飲む人の往昔から長生と志移へと正札の
附て有るを意地の穢ねへのさるアと内を外なる行
状を顔ふも出さず忠やり其仕こる一女房るがら
氣の毒ふ思ふも自然なる愛相も親しき中の禮義
るるべし折うう小僧が障子とあけ遠しき声をして



司且那さん大變がなつ始りまゝと申て清兵衛「ナニ
 大變が始りまるといふ大變が始りまるとと申し
 て表を人が駈歩行ますり何の事りと存例の
 往過の隊長とあり早速火元見と出かけ承り
 まゝとら伏見奉行の林肥後守さまから所司代さ
 まの酒井若狭守さまへ左様いつと参つとあり播州姫
 路へ浪人とのが集り島津和泉とつゝ人と大將めて
 京都へ押して来るり油断大敵御用心とるの

で酒井さまの怖り仰天さう言ふ訳ぢやアいつ何時
薩戸芋が浪人者と引きつれて京都へ押し込んど
来るかも知れぬとて関東から上つて居る武士を
残らず呼び集め甲や冑も身を固め弓銃砲と以て二
条のお城で軍を為るのどこのと若おつ始まつたら
何様をませうと私の胸がまづ先へ陣鐘陣太鼓でど
んちやん致しまする訳でございませうとそりや何ゆ
ても騒ぐい話し成程島津和泉侯が姫路へお着

ふるまると直平野次郎が首領とるり多勢の浪士を
引き連れて御旅館へおしこし攘夷鎖港の歎願書と
出し頼りな候ふ迫つこので候も餘義多く浪士ら我
伏見まで率ひて上らうと云ふととておまぢぢやア
大方おの事ごらうハテなアと腕を組と監え居らう
しが三條さまの河村能登守さま長州さまの山田
虎之助さま西郷吉之助さまぬまどの何様もされとら
思はずも言ふと子僧が吹かちり一柱さまの先刺

表と出通りでは社いす〜と云れて、口と押へぬむりりるり此時す〜も見世の子僧が平野さぬか〜手紙が参りま〜と差し出せむ清兵衛の胸安か〜ぬ折ある故出す手も遅〜と清取りて「使ひの者の何様〜」と「差置ど〜と申し直み帰りま〜」と「左様うよろ〜」と言るが〜手紙の封と切り「是は大ぶ長文句ござ〜」と其処で小生こと西郷吉之助および清水寺の成就院月照ら〜と共み幕

威と避け〜不至るといへども諸侯ま〜の徳川氏お歴せられ夫が崇り〜恐れ我輩を捕縛るさんと為るよ因り躬と寄すべきの方るければ月照子の薄命と歎ト終〜西海の波と投ト底の藻屑とるりたるなり
月照の西京清水寺法性院の住僧あるより〜の前号より既小折々言ひたり此人身の世外に居ると〜勤王無二の志あると〜

因り近衛公の愛顧ふうく竊に廟議の機密小聞
西郷隆盛平野次郎らと事と謀り徳川政府を
廢さんとせしふ此はる政府の威力や哀ふると
りども猶強きところ有りて勤王の黨を捕ん
とすること嚴あり然れども西々ら薩藩の
威名小遠慮し幕吏もとやすく手と下さず獨
月照と縛さんとして探索せしむると嚴重なれ
近衛公月照と南都へ落さんと謀る月照西

郷のりく一往き此事をつら西々ら海江田と共月
照と轎小乗せ夜半ひそく南都へ送らんとせし
幕府の捕手いつう是と知り轎の中を窺ひ附
来る海江田斬てまてんと言ふ西々押し止め轎の
前後小立ふさがり守護なり大坂の薩州郎まど
連往き潛匿し置き世間の模様を探る南都を
猶危ふきと以て中國へ落さんと大坂より乗船
させくりしよ此時もまると捕手の為り追れ

たれとらうが出帆の後るれを僅み虎口と遁れと
り期て月照の長門の赤間ヶ突より此処に
在る白石一郎の同志の勤王家なる故尋ね往き
しよ白石遂一吐き薩藩の鹿兒島にある北條右
門ふ依托んと自身月照と伴ひ薩戸の米津へ至
り上陸して鹿兒島の城下よ入らんとあるは
関門嚴しく他郷の者の入るを免さずとを再度
野間の関より船ふ乗り阿久根へ廻りし此処

関門の見張りすところ緩りなりし故漸くあや
鹿兒島の城下ふ入ることを得たり然るは藩吏
の内ふ幕府へ心を通へす者あれを此地とりども
猶探索をびりきと以て志せ一方への足と止めず
同宗の寺院に知る者の住僧とまりし有れば其寺
へ往き暫時忍びて居たりしは初る遠境の寺院
へまゝに探索来りてきびりければ進退すべし究
まわり此とき西々隆盛も京師より逃れ帰り鹿

兒島ふありしが月照と尋ね来り平野二郎の月
照と共に前より此処に居り二杯茶を烹んとし
て勝手へ往きし後ふて西郷言ふ僕の今日師と
訪ひしに參政より師と諭して早く日向の方へ
落さすべしとの内意ありと嘆き月照暫時うん
がへ日州の吾が死るところと思はるる吾を止めよ
幕府の爲に戮せらるるを嫌ひ大いよ君方の心
と勞したり天運猶開ることあり事の茲に至る

は是非る願ふを我が首と君の手と刻て殺し
たまわれ同志の者の死に死を思ひ遺すところ
るに夫来介錯と頼むとく西郷ふ膝つき付れ
む西郷の大息一歳何の辛苦画餅とあり憚るま
場ふ迫りしに天あり命なり先師死を僕もま
死んと竊よその針策を納しし時平野二
郎土瓶茶碗を持出て茶をすめければ三人とも
是を喫して後月照の僕の十助を連れ西郷ふ

よび平野も共小船も乗り日向へ往んと鹿見島の
岸より漕出とり時ふ十月十五日の夜ありて風和
らうよ波平りるれを照り勝る月よ水の面の宛然
鏡の如く冷光船と影ひて亦と得がごとく良霄
るり茲よ於て月照の為よ齋したる酒食をひ
らき一盃を傾け西郷言ふ今宵の慷慨激談と
禁トたる風流愉快のこことと評へ相俱よるるさ
むべしとて詩と詠ト歌とよと樂とすてぐる酣

るるこも船の稍磯の離宮の畔と下れり時ふ月照
ふふ端ふ立ちいづ月の半天よ廻ると仰ぎ黒字執出
し曇るるるさ心の月もさらま瀉あまの波るる
入りぬる大君のためふ何う惜りらんさらまの
瀬戸ふ身の沈むともト二首の姿を懐中紙の端
ふ書とめ忽ち海よ飛入りて底の藻屑と消え
とりけり此折り西郷も共よ海へ飛び入りて月
照と齋しく入水して死しとりと言ふことと世ふ



清水寺の月
 照日向の沖
 身と投ず

流布させんと謀畧るり物るべり月照が十

七回忌又當るの日西郷の詩あり

相約投淵無後先 豈圖波上再生縁

回頭十有餘年夢 空隔幽明哭墓前

實は是安政五年十月十五日の事ありて勤王無二の

大忠臣を龍宮城の人と為せし大息哭泣するよ

堪へたり西郷吉之助も此とき月照師と共に入水

の体を示し薩海の波に没し死したりと世間へ流

布ふのさせとれと実じつの尚なほ有志ゆうしと募もりて薩長さつちやうの間まと
奔ほん走そうるる居おるると思おもひるる小生せうせい事ことも苦中くちゆうの苦くと忍しのび
猶なほ潛伏せんぷくありりとりりりが先頃せんきんよりより摂播せつぱの間まみみおおいいと
尊攘そんじやうの説せつと主張しゆぢやうしし既すでにに二百餘名にひゃくじゆうめいの勇士ゆうしを得えたり
然しかるる去さるる四月中しがつちゆう島津和泉君しまづわいみづ自國こくをを發はつしたまひ
江え戸どみ赴おもむくるとして播州姫路はつしゆうひめぢふ着ちやくせしと聞きく故ゆゑ
小生せうせい巨魁きょけいととなりり二百餘人にひゃくじゆうにんと共ともに島津しまづ侯こうの旅館りやうかんに
群ぐん参さんしし書しよと和泉侯わいみづこうよりよりどどして去さるる嘉永六年かえい六年は外がひ
春雨はるぐ正せい二十にじゆ

異いら渡来たふらいせしより以もつ来こ幕吏まくしその政事せいじをを謬あやるるみ
乘のりりり夷人いじんををいいふ増長さうちやうしし大坂兵庫堺おほさかひんぐわさかいの開港くわんこうも
當月たうげつの條約じやうやくなりなり尙なほも三津さんしんと開ひらききるるを夷人いじんらら商館しやうかん
ととななづづけ城郭じやうかくの如ごとき建築けんちくををななしし港内かうないに軍艦ぐんかんを
敷しき系けいぎ海陸かいりくの要路えうろを塞ふさぐぐ鳳闕ほうかくの危あやふふききと風前ふうぜんの
燈火とうかの如ごとくくなならんらん因よりり西國さいこくの有志ゆうしらと相計あひしりり勤きん
王わうの志しと遂つひんと思おもふ君侯きんこう臣しんららが微意ひいをを憫あいいささそ
此この儀ぎををりりつつ宜よろしく奏そうしし給たまはれと願ねがひひ出いせとれど

も埒らちありず折やから僕が古主こしゆ筑前ちくぜんのくさ大守おほし黒田くろゑ彦ひこ
 江戸えどへ参勤さんきんあらんとて播州ばんしゆ大倉おほくらまで來ら駕がせら
 れしうく直ちちよ推参すおさんして此度このたびの一挙いつきよと忠告ちゆうこくせし
 ところあふ豈計あやこころらんや捕縛おとどくの繩なひめふ掛からんととよ讀よ
 つ四邊あつ見みまりして思おもはず溜息なげはくるみり

春雨文庫三編上の終

五五五

010190509465

